

サンケイかわら版



Bringing you
the New Asian
taste and styles



詩仙 李白

九・十月合併号
酒ありてこそ・詩仙李白

酒なくしてこの人なし！
詩仙と呼ばれた男、李白

中国において李白（りはく）を知らない人はいない。杜甫（とほ）と並び称されるこの大詩人は、どこか真面目くさい杜甫とは違って、私の中では何となく「不良」のイメージが定着している。

各地をふらふらと放浪したこともそうだが、無類の酒好きである、というところが彼を「優等生」イメージから遠ざけているのかもしれない。だが、そんなことは彼の魅力を上げこそすれ、名をおとしめるものではない。私はこのアル中親父が大好きである。彼の自由奔放な詩は読む者を圧倒する。

李白の酒好きは尋常ではない。杜甫が「李白一斗詩百篇」（李白は酒を一斗飲み、詩を百篇作る）と詠じていることからわかるように、酒を飲まずば詩を作れないかのようだ。

これほどの酒好きなのだから、もちろん彼が詠んだ酒の讃歌は数多い。有名なところでは「将進酒」月下独酌」が挙げられるであろうか。

李白の詩で個人的に好きなのは「贈汪倫」である。「汪倫（おうりん）」とは別に名のある詩人だとか権力者であるとか言うわけではない。歴史に埋もれた一介の村人である。李白が彼の村に滞在していた折、酒を振舞うなど世話を焼いてくれた人らしい。李白が村を離れようとした際、歌で彼を見送ってくれた汪倫を詠ったのがこの詩である。村で二人がどれほど親交を深めたか、そして李白がどれほど愛されていたか想像するに難くない。

詩の冒頭に己の名前を出すところなんて、心憎い演出だ。もしかしたら、舟の上で李白は一杯ひっかけていたかもしれない。客観的に情景を見ることで、汪倫の思いやりに対して生じる申し訳ないような気恥ずかしさをぼやかしつつ、離別の悲しさと感謝の気持ちを鮮明に浮立させているようにも思える。

李白は、水に映った月をすくおうとして、そのまま水中に入って死んだと言われている。もちろん伝説だが、きっとこのときも酔っ払っていたのだろう、多くの人に愛される風来坊にふさわしい最期ではないだろうか。

贈汪倫

李白乗舟将欲行
忽聞岸上踏歌声
桃花潭水深千尺
不及汪伦送我情

李白

汪倫に贈る

李白

李白が舟に乗って、さあ旅立ち、と、としたとき、岸の方で足を踏み鳴らしながら歌う声が聞こえる。
桃花潭の水がどれほど深くとも、汪倫が私を見送ってくれた情の深さには敵うはずもない。



株式会社サンケイ
東京都江東区有明 1-4-13
TEL 03-3529-2620 FAX 03-3528-1961
<http://www.nas-sankei.co.jp/>

李白の時代、まだ白酒は存在しません。よって、この飲んだくれの心の友となり得たのは黄酒を始めとする銘酒でありましょう！